

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370487

研究課題名(和文)戦後初期における在日朝鮮人の言語とその継承に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Study on the Language of Korean in Japan and its' Inheritance in Early Postwar Japan

研究代表者

池 貞姫 (CHI, Jong Hi)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：60294782

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：戦後初期における在日朝鮮人の言語資料、とりわけ朝鮮人学校の教材や副読本について、(1)関係資料の収集と電子データ化、(2)表記・語彙等の言語学的分析、(3)収録作品の出所の調査、(4)民族教育に関わった当事者へのインタビューなどを行った。その結果、歴史的転換の時代にあつて、資料における収録作品や表記などは、植民地時代の形跡を残しつつも、言語使用や言語教育において民族を主体とする方向に変化していく様相を具体的に抽出した。研究代表者・研究分担者は、その研究成果を学会等で発表するとともに、最終年度には韓国からの研究者を招聘し、公開研究会ならびに関連事跡見学を実施し、活発な研究交流を行った。

研究成果の概要(英文)：Through the textbooks and supplementary readers for Korean pupils in early postwar Japan, (1) we collected the related materials and made them into electronic data, (2) we analyzed various types of notation and vocabulary, (3) we researched origins of included works, and also (4) we interviewed the people concerned with ethnic education. As a conclusion, we could find the facts that Koreans in Japan became more proactive in Korean language education in the era of historical change, though included works and notations in materials were partly influenced by the occupation of Japanese colonization. We made presentations on our research results at the academic conferences. In the final year, we conducted research exchanges actively at our open study meeting and vestige visit by inviting a scholar from Korea.

研究分野：朝鮮語学

キーワード：戦後初期 在日朝鮮人 朝鮮人学校 教科書 朝鮮語 正書法 民族教育

1. 研究開始当初の背景

戦後初期に在日朝鮮人によって立ち上げられた朝鮮語講習所・朝鮮人学校などで使われた教科書や副読本などは、長年未公開であったが、近年諸機関(米国メリーランド大学プランゲ文庫・東京外国語大学朝鮮語教室・朝鮮大学校在日朝鮮人関係資料室等)で公開され始め、ようやく研究の緒に就いたところであった。在日朝鮮人の言語を時系列に考察する上で、この貴重な資料について、書誌学的調査の補完と言語学的な分析が俟たれていた。

2. 研究の目的

本研究は、戦後初期(1945-1949)における在日朝鮮人の言語資料、とりわけ朝鮮人学校の教科書や副読本などの書誌学的調査を綿密に行い、それらに表れた言語的特徴を明らかにするとともに、一世から二世へと朝鮮語を継承するための朝鮮語教育がどのようなものであったか、その実態を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、まず関連資料で未調査のものを国内外で収集し、資料刊行時の時代背景や関連分野の事情を知るため、他分野の専門家にも随時師事を仰ぐこととした。次に、収集した資料を基にして、電子データ化を行い、言語学的・言語教育学的分析を行うための基盤づくりに努めることとした。そうした作業に立脚して資料分析を行い、その分析結果については、学会・研究会発表を行うとともに、論文発表をすることによって、社会に広く発信することとした。

4. 研究成果

戦後初期における在日朝鮮人の言語資料、とりわけ朝鮮人学校の教科書や副読本について、(1)さらなる関係資料の収集と電子データ化、(2)表記・語彙等の言語学的分析、(3)収録作品の出所の調査、(4)研究成果の発表と研究会・関連史跡見学の実施、(5)民族教育に関わった当事者へのインタビューなどを行った。

その結果、資料における収録作品や表記法などは、歴史的転換の時代にあって、植民地時代の形跡を残しつつも、言語使用や言語教育において民族を主体とする方向に変化していく様相を、具体的に抽出することが可能となった。研究を通して、以下のような成果があった。

(1) 関連資料で未調査のものを国内外で収集した。特に、朝聯が発行した教科書以外にも、朝聯とは立場を異にする朝鮮文化協会の朝鮮語教科書(個人所有)や朝鮮本国で発行された教科書・副教材なども収集した。

(2) 在日朝鮮人聯盟(朝聯)が1946年から1947年にかけて刊行した朝鮮語教科書に

ついて、その朝鮮語の特徴を主に正書法の観点から分析した。朝鮮語の正書法は1945年の朝鮮解放の時点で、朝鮮総督府の作成した「諺文綴字法」と朝鮮語研究会の作成した「朝鮮語綴字法案」(以下「統一案」)の二者があった。朝聯が朝鮮解放後、日本という「外国」において朝鮮語教育をするにあたっては、何らかの言語規範に依拠して教科書を作成したと推定される。1947年に発行された学年別教科書『初等国語』のテキストを分析し、その様相を調査した結果、『初等国語』の各巻は朝鮮総督府の諺文綴字法ではなく、朝鮮語研究会の統一案におおむね準拠していることが判明した。なお、統一案は1933年制定後、1937年、1940年、1946年に改定しているが、『初等国語』は1946年改訂版に準拠していると見られる。しかしながら、1946年改訂以前の特徴をそのまま引きずっているものも少なからず見られた。例えば、1940年から変更があった部分のうち、「間の s ()」を終声字として表記する方法は完全に1946年版に依拠しているのに対し、分かち書きは1940年版の名残が多く、とりわけ不完全名詞 kes ()「もの、こと」がほとんどの場合に続け書きされている点は、1946年改訂以前の特徴をそのまま引きずっている。統一案に依拠しない特徴的な表記法に、長母音を音引き「ー」で表記していることである。音引きは諺文綴字法において日本語をハングル表記する際に用いる規定があるものの、朝鮮語の表記に用いる規定はない。しかし、『初等国語』では外来語の表記に多く音引きが見られた。さらには固有語においても意図的に長母音で発音する単語に音引きを付けた例が間々見られた(a-ni - 「いいえ」など)。

他に語彙の特徴を見ると、会話文のみならず地の文にも、話しことば(nucin <nucun 「遅い」など)や方言形(chiun <chuun)に由来する形が少なからず見られた。

同じ『初等国語』でも「1学期用」だけは他の巻と若干様相が異なり、「間の s ()」を終声字としてではなく2単語間に1文字として表記している。これは1940年版に依拠したものである。また、文章符号は本文が横書きであるにもかかわらず縦書き用のものを用いている点(「、」「。」やカギカッコなど)も1946年改訂版の統一案を十分に受容する前に、他の巻に先駆けて作成された可能性が高い。

『初等国語』はすべての巻が横書きである。『初等国語』の前年である1946年に発行された『初等国語読本』は、テキストが縦書きであることが『初等国語』とは大きく異なり、植民地時代の出版形式を踏襲していると見ることができる。構成は字母の提示とそれを用いた数個の単語の提示に始まり、朝鮮総督府発行の『普通学校

朝鮮語読本』に類似する。また、助詞を前の名詞に付けず分かち書きをしている点も、『普通学校朝鮮語読本』も同様である。しかしながら、本の途中から助詞を前の名詞に付けて書いており、この本が1人の執筆者によって書かれたものではなく、正書法の観点を異にする複数の執筆者によって書かれたことが推測される。

このようなことから、戦後初期の朝聯の朝鮮語教科書は、1946年改訂版統一案におおむね依拠しつつも、それ以前の正書法に依拠する部分もあることがわかった。このことは、さまざまな執筆者がそれぞれの正書法観、言語感覚に依拠して執筆していたことがうかがえるものであった。

(3) 朝聯発行の教科書や副教材に収録された作品について、その作者・出典を明らかにするとともに、その作者の経歴や作品群を通して、時代や本国との連続性を考察した。その結果、植民時代の朝鮮総督府発行『普通学校朝鮮語読本』に掲載されたものも少なからずあり、植民地期の連続性が見られた。また、時代は冷戦体制が進化しつつも、本国と同様、左右両派の作家による作品が併存し、とりわけ、日本による植民地支配からの「解放」と朝鮮語の復権が核であったこと、また、その民族意識が、代を継いでの朝鮮語継承に連なっていく礎であったことが浮き彫りになった。

(4) 研究代表者・研究分担者は、その研究成果を学会等で発表するとともに、最終年度には、韓国からの研究者を招聘し、公開研究会(「解放期の朝鮮語教育と朴泰遠 在日と本国」於東京外国語大学)ならびに関連事跡見学「朴泰遠ゆかりの東京の地をめぐる文学散歩」於法政大学・新宿等)を実施した。この研究会では、解放後の朝鮮と在日朝鮮人の教育現場で朝鮮語教育がどのようになされたか、解放後の教科書に登場した朴泰遠の作品や副読本などを軸にして、在日朝鮮人と朝鮮本国の連続性を探り、さらには朝鮮本国と日本との関係性の一端などを一般公開し、日韓の研究交流を活発に行った。プログラムや内容は、以下の通りである。

3月3日(金) 研究会

「解放期における在日朝鮮人学校の教材と本国との関連性」(池貞姫)

「朴泰遠の児童文学作品に描かれた「国語」教科書」(牧瀬暁子)

「朴泰遠と解放期の国語教育」(鄭賢淑)

3月4日(土) 関連事跡見学

朴泰遠が学んだ法政大学や、朴泰遠「喇叭」(『新生』1931年6月)「半年間」(『東亜日報』1933年6月15日~8月22日 中断)「小説家仇甫氏の日」(『朝鮮中央日報』1934年8月1日~9月19日)などに登場する新宿・神保町・神楽坂をめぐり、朝鮮の

モダンボーイの近代経験が、日本での近代経験と密接に関連していることを考えるるよすがとした。

(5) 戦後初期の朝鮮人学校で学んだことのある方へのインタビューを行い、戦後初期の民族教育の実態や時代相、日本人教育者との交流などについて知るところとなった。

上記の研究成果で、研究期間内に発表・論文化できなかったものについては、今後順次発表・論文化していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

池貞姫、牧瀬暁子、高橋梓、「< > (朴泰遠ゆかりの東京の地をめぐる文学散歩関連資料)」、『仇甫学報 16』、仇甫学会、査読無、2017
<http://gubo.re.kr/>

〔学会発表〕(計2件)

池貞姫、「解放期の在日朝鮮人学校の教材に現れた童謡・童詞について」、第12回 KOREA 学国際学術討論会、国際高麗学会、2015年8月19日、ウィーン(オーストリア)
趙義成、「在日同胞の言語教育と南北の言語問題」、光復70周年記念南北言語統合のための国際学術会議、国立国語院、2015年8月14日、ソウル(韓国)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池 貞姫 (CHI, Jong Hi)
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：60294782

(2) 研究分担者

趙 義成 (CHO, Eui-sung)
東京外国語大学・大学院総合国際学研
院・准教授
研究者番号：20343725

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

伊藤英人 (ITO, Hideto)
明治大学・非常勤講師

牧瀬暁子 (MAKISE, Akiko)
現代語学塾・講師

高橋梓 (TAKAHASHI, Azusa)
東京外国語大学大学院総合国際学研究科
博士後期課程